

春の夢さめて

谷崎潤一郎と松子が勝山で過ごした十一月



| column |

津山から運ばれた牛肉

終戦前夜のすき焼き

大月ヒロ子

第二次世界大戦の日本での終戦前夜。つまり1945年の8月14日の夜、勝山では二人の文豪が食卓を囲み歓談していました。一人は東京大空襲で焼け出され、岡山市に疎開していた永井荷風。彼の『遷東綺譚』や『断腸亭日乗』には、食にこだわり続けた作家らしく、様々な店の料理が出てきます。そしてもう一人が、同じく美食家であった谷崎潤一郎でした。谷崎は1943年に月刊誌で『細雪』を発表し始めていましたが、戦時中にそぐわない内容と判断され、掲載が中止となっていました。彼は家族を伴って1945年5月に津山へ。そして、7月には疎開先を勝山に変えて暮らしていました。

戦局も極まった時期ではありましたが、岡山県の勝山あたりでは、少しは息がつけようような空気もあったのでしょうか。8月13日から15日に、永井荷風は谷崎宅を訪れます。「津山より牛肉を買ってきたので、来られたし」とのお誘いが来たためです。昔からの肉食文化が息づく津山ですが、物資が乏しい戦時中でも、牛肉を入手できたということには驚かされます。しかし、やはり大変高価なものだったようです。大学卒の月給の2～3倍の金額の牛肉4キロ弱が、文豪二人を囲む宴に用意されたといえます。

勝山には、そんな当時の谷崎潤一郎一家のエピソードを伝え聞いている方々が、今も多くいらっしゃいます。谷崎自らが買い物カゴを提げて、食材を買いに出かける姿を見た人。松子夫人や夫人の妹らが、着物を着て町を歩く華やかな姿に驚いた人…そういった情景を、ついこの間のことのように語り継いでいるのです。

さらには、ちょうどこの頃、仕上げに取り掛かっていた『細雪』の原稿を清書するという大役を担う勝山在住の方が、谷崎自らの面接で決まりました。決め手になったのは、文字のいかんではなく、足袋の白さだったとのこと。細部まで手を抜かず、きちんと美しく暮らす姿勢に、信頼を寄せたのでしょうか。作品は1946年から47年にかけて発表されベストセラーとなりました。いまでは書籍だけでなく、映画などにもなっているので、ご覧になった方も多いのではないでしょうか。

勝山では、疎開先の小野旅館さん、呉服屋を営んでいらした水島家などとの交流が深く、水島家には、皆が集まった写真が今も大切に残されています。

＊第20回おかやま県民文化祭 これがOKAYAMA! プログラム「美作国 食は文化の交差点」冊子（発行2022年8月）より転載

おおつきひろこ○IDEA,INC.(岡山県倉敷市玉島)主宰。家庭や企業から日々生み出される廃材を人の創造力で生まれ変わらせる「クリエイティブリユース」を提唱。活動の拠点「IDEA R LAB」を開設。

制作○勝山観光協会 岡山県真庭市勝山 420-2 中国勝山駅構内
tel.0867-44-2120



なつかしき都の

春の夢さめて

空につれなき有明の月

― 二十八 ― 「都わすれの記」より

疎開先の勝山で 親交を深めた谷崎と松子

小説家・谷崎潤一郎は、昭和20年7月、第二次世界大戦中に疎開のため家族とともに真庭市勝山(旧真庭郡勝山町新町)にある小野はる方の離れに居を構え(12月に今田ツネ方・今田屋旅館に転居)、町の人々との交流が始まります。呉服屋を営んでいた水島喜八郎・芳子夫妻とは、水島家に横浜から疎開していた中之庄谷美智子さんが弾いていたピアノの音色に惹かれて、谷崎が水島家を訪れたことがお付き合いのきっかけでした。「お義母さんはもてなすことが大好きな人でした」と水島家に嫁いだ節子さん。水島家で開かれた谷崎家の送別会の席には“山海の珍味”が並び、その心尽くしがうかがわれます。「私が大学入学の時、松子さんからお祝いをいただきました」と話すのは、清友英太郎・道子夫妻の長女敬子さん。実は英太郎さんは旧制第三高等学校(文藝部)の学生時代に谷崎と交流があり、その時の手紙が残されています。英太郎さんと谷崎、勝山での偶然的再会

鳴門橋を渡って、旭川の対岸から城山、太鼓山(手前)を眺め、神橋へ戻り中町を歩くのが谷崎の散歩コースでした。



谷崎潤一郎(前列左3人目)・松子夫人(右隣)、長女恵美子さん、渡辺重子さん(松子の妹)を招いて水島家で行われた送別会。親交のあった清友夫妻、小野夫妻の姿も。疎開中勝山で撮られた唯一の写真(昭和21年5月)。



取材協力／清友敬子・水島節子(敬称略)

でした。両家ともに特に松子夫人とは、戦後も手紙のやりとりや谷崎家に招待されるほどの親密ぶりでした。

戦中の混乱のなかでも創作を続けていた谷崎。勝山で『細雪』の執筆はもちろん、多くの歌を詠み、その短冊を町の人に贈っていたといえます。ひとつの町との出会いは、谷崎家にとってどんなひとときをもたらしたのでしょうか。迎えた勝山の人々には、あたたかな思い出とともに現在も記憶に残っています。



古書五車堂・中川幸徳さん選書 勝山と谷崎の関係を知る本

谷崎は疎開暮らしを日記や歌などに書き残しています。そのなかには勝山滞在中のことも。古書五車堂の中川さんにご紹介いただきました。



勝山町は旭川の上流なる山峡にありて小京都の名ありといふ、(中略) 街にも清き小川ひとすぢ流れたり、われらは休業中の料理屋の離れ座敷一棟を借りて住む

「都わすれの記」

昭和20年7月、谷崎潤一郎は松子夫人、娘恵美子とともにここ勝山で疎開生活を始めます。『疎開日記 谷崎潤一郎終戦日記』(中公文庫)は表題作のほか、この時期の日記「越冬記」、生活のなかで詠んだ和歌「都わすれの記」、戦時下の永井荷風や吉井勇との往復書簡などを収録。谷崎一家の勝山での生活の様子や、自身の心情をうかがい知ることができる格好の資料です。食に関する記述が多いのも興味深いです。

8月13日、岡山市に疎開していた永井荷風が谷崎の招待で勝山にやって来ます。8月14日には牛肉を買い求め、「夜酒二升入手す。依って夜も荷風氏を招きスキ焼を供」(『疎開日記』)にしています。その時の様子は荷風の日記『摘録 断腸亭日乗(下)』(岩波文庫)にも記されています。

翌8月15日に荷風は勝山を去りますが、谷崎は昭和21年5月頃まで生活をしています。勝山滞在中、当時軍部から時節にそぐわぬと掲載を止められていた『細雪』(新潮文庫ほか)の執筆は続けられていました。



谷崎潤一郎
『疎開日記 谷崎潤一郎終戦日記』
(中公文庫)



永井荷風
『摘録 断腸亭日乗(下)』
(岩波文庫)



谷崎潤一郎
『細雪』
上・中・下
(新潮文庫)

なかかわゆきのり
古書五車堂店主。古本の販売・買取ほか、イベント出店や選書など、本に関わる様々な活動をおこなう。